

家が差し押さえられて
人生終わりかと思ったら

親戚の初恋の お兄さんに

引き取られ酔ってる所
を夜這いしたら

理性ブチ切れ 大人ちんぽで

おまんこ分からされちゃった話



ろくもいふてきま

絢辻 透

”しばらくの間、千春を頼みます ”

父親からの手紙が机に置かれている。

座敷机に所在なく座る私と、そんな私を囲む親戚たちは、全員もれなく困った顔でその手紙を見つめていた。

当たり前だ。いくらギャンブル狂いの父親と言えど、今までこんなことはなかった。夏期講習を終えて帰ったら、家が差し押さえられていた——なんて。

「まさか借金があつたなんて……」

「アイツ、千春ちゃんだけはちゃんと育てるって息巻いてたのに」

「しばらくの間ってどんくらいなんだよ、なあ？」

「帰ってくるかもわからないわよ、こんなの……」

お母さんが私の小さい頃に亡くなつてから、すっかりギャンブルにハマってしまったお父さん。競馬で負けて、パチンコで負けて……それでも、私をどうにか大学まで入れてくれた。

（学費は大丈夫って言ったのに、どうして……）

親戚たちの生産性のない会話を聞きながらうつむいてみると、突然、縁側のほうからガラガラと勢い良く障子の扉を開ける音が響いた。

「あー、やっぱり婆ちゃん家か。よかったよかった、家いねえから焦ったよ」

「そ……宗一郎！？ あ、あんた今までどこに……っ」

あちこち跳ねた髪の毛と、無精ひげを生やした顔。

大きな身体で窮屈そうに鴨居をくぐって辺りを見回している。

親戚一同が騒然とする中、誰だっけこの人、見たことある気がする……と、私は首を傾げていた。

「さあね、どこでもいいだろ。事情は聞いてる、千春は俺が預かるから」

——預かる？

どういうことかわからない。親戚から矢継ぎ早に飛ぶ質問を一切合切無視したその人に「千春どこ？」と呼ばれ、慌てて立ち上がる。

うお、でっかくなったなあ、と笑う顔を見て、ようやく思い出すことができた。

「大丈夫、うまい飯食ってゆつくり出来るところ連れてくただけだから。行くぞ、千春」

この人は——小さい頃よく私と遊んでくれていた、一回り年上の従兄弟。

葛城 宗一郎（かつらぎ そういちろう）さん。

私の、初恋の人だ。

鳥の鳴き声で目を覚ました。

広い和室で慣れない布団だったけれど、不思議とよく眠れた気がする。

起き上がって、窓の外を見る。青々とした田んぼと、いくつも連なった山が見えた。

何もねえ所で悪いけど、夏休みいっぱいはどこで過ごして——と言われて連れてこられたのは、うちから二時間以上離れた山間の町の、高台にある大きな屋敷だった。

「千春、起きたかー？ 朝飯あるから冷めねえうちに来いよ」

「あ、はい……っ」

扉の向こうから宗一郎さんの声が聞こえる。

ずいぶん古いらしいお屋敷は、中はリノベーションされていて旅館のようにきれいだった。

宗一郎さんは、どうやらこのお屋敷にひとりで住んでいるらしい。

慌てて着替えて、部屋から出る。

「おはようございます……宗一郎さん？」

「はよ、あー、こっちこっち」

三十畳はありそうな広いリビングは洋風に改装されていて、床はフローリングだ。大きなテレビやＬ字のソファも置かれている。

きよろきよろとしていると、隅のほうのダイニングテーブルから呼ぶ声がした。

急いで行こうと思って早足で歩み寄るものの、座っている宗一郎さんの姿を見て思わず足が止まった。

「——……宗一郎さん……ですよね？」

「んあ？ ……ははっ、そんな違つて見える？」

椅子の上で片足を折った、少しだらしない座り方をしている宗一郎さんの姿が——かなり違つて見えたからだ。

昨日まで生えていた無精髭はなくなっていて、彫りの深いぱっちりとした目元が印象的だ。ぼさぼさだった黒髪も艶めいてきれいに整っている。

少しヨレた白シャツのボタンは三個くらい空いているけれど、それにすらもなんだか色気を感じてしまう。

小さい時、私を肩車して遊んでくれたかっこいいお兄さんの面影そのままの姿に、どきりと心臓が高鳴った。

「えつと……髭がないからかな、すごく違って見えちゃいました」

「まあな。剃っちゃうとさあ、みーんな俺に惚れちゃうから。敢えて生やしてんの」

つるんとした顎を撫でながら笑っている宗一郎さんが眩しい。

確かに、と頷くと、ばか、冗談だよ！ 千春に不潔に思われたくねえだけ！ とちよつと恥ずかしそうに言われてしまった。

そんな風には思わないけれど……と思いながら席について、用意されていた豪華な焼き魚の朝食にいただきます、と手を合わせる。

「！ おいしい……これ、宗一郎さんが作ったんですか？」

「俺はこんな美味いもん作れねえよ。家のすぐ下んとこの婆さんがさあ、年金だけじゃ暮らせねえって言うからさ。朝飯作ってもらう代わりにちよこつと渡してんの」

「そうなんです……すごい、おいしい……」

「若い女の子来るつつたらずげえ張り切っちゃってさ。どっかから採れたての鮎貰ってき
て。旅館みてえだよな」

「ほんとですね。こんなの食べるの、初めてです」

鮎の姿焼きと大根おろしに、ほかほかのご飯。お味噌汁は具沢山で、漬物は三種類もつ
いていた。

家ではこんな豪華なご飯、食べたことがない。

このリビングよりも小さな中古住宅で、私とお父さんはいつも、スーパーで一番安い出
来合いのものを食べていた。

「……大変だったな。夏休み終わるまではゆっくりしていけよ。ここは静かだし、空は広い
し、落ち着くぜ」

「はい……でも、お世話になるので。何か私に、出来ることがあれば……お掃除とか」

「いいんだって。千春、今まで家事と勉強漬けだったらいいじゃん？ 人生の夏休みが来た
と思っさ。なんも考えず、ゆっくりすりゃいいんだよ」

言い聞かせるような言葉におずおずと頷く。

宗一郎さんはたぶん、お父さんから事情を聞いているんだと思う。

なにも教えてはくれなかったけれど、預かってきた荷物だという勉強道具や着替え、小物類などは私がいつも使っている、お父さんしか知らないはずのものだった。

「宗一郎さんは、ずっとここに住んでるんですか」

「そうそう。五年くらい前かなあ、母方のじいちゃんが大地主でさ、お前どうせ家に籠ってんならここの管理しろって頼まれて、そっからずっとこっち。じいちゃん、フリーランスの意味分かってなくて、俺のこと引きこもりだと思ってんだよな」

「フリーランスなんですか、宗一郎さん」

「言ってなかったっけ？ あーそうか、最後会ったの俺がまだ学生の時か……フリーランスだよ。ゲーム作ってんだ、俺」

「ゲーム？　すごい……」

最後に会ったのは、確か私が小学生低学年くらいのも、お正月だったと思う。昨日集まっていたおばあちゃんの家で、遊び相手がなくて暇していた私に、お古のゲームをくれた

んだった。

——あまりよく覚えていないけれど、あの夜、何か揉めていたような。

「千春、覚えてねえかな。あの時、母方のほうが地主ってバレてさ。葛城家は……なんつか、そこまで裕福じゃねえだろ？ 無心されて、父さんがブチ切れちゃって。それからもう、葛城家には二度と帰らん、お前も連絡取るな！ つって」

「わあ……そうだったんですね」

「あの時、千春の父ちゃんだけはタカんなかったんだぜ。一番金なかっただろうに」

けらけら笑う声に釣られてふっと吐息が漏れる。

お父さんは確かにギャンブル狂いだったけれど、借金をしたり、集ったりはしない人だった。どうして借金なんか……と思っていると、先に食べ終わったらしい宗一郎さんが席を立った。

「ご馳走さん。俺、いつもリビング横の部屋で作業してるからさ。千春はここでのんびりし
といて。そこのテレビに繋がってるゲーム、何でもやっていいから」

屈んでぽんぽんと頭を撫でられる。

頷くと、よし、と笑顔を見せられた。緩む目元があの時と変わらない。

「これからしばらく俺のことは……父親ってほどの年じゃねえか、多分、うん。お兄さんだな、お兄さんだと思って。な」

宗一郎さんは笑いながらそう言い残して食器を片付け、向こうの部屋に戻っていった。

（……宗一郎、お兄ちゃん）

懐かしい響きだ。

噛み締めるほどに自分で自分が恥ずかしくなる。

家を差し押さえられ、父親の行方もわからず、初めての場所に連れてこられて。不安でいっぱいなはずなのに、それ以外の胸の高鳴りを自覚してしまっていた。

——だって、また会えてうれしい。

大好きだった、宗一郎お兄ちゃんに。

「くく……っあ、あ、いけた、いけました、クリアだ……っ！」

「すげえ、倒すの早かったなあ千春！ けど実は……？」

「え……？ まさか、ま……まだ……！？」

画面に現れる真のボスを見て愕然とする私を見て、宗一郎さんがけたけたと笑っている。宗一郎さんの家でお世話になるようになってから十日。

夜はいつも、こうしてオススメのゲームをして過ごすようになった。

「ううつ、もう体力ないから倒せない……」

「いけるいける、回復アイテム使ってなかっただろー？」

こんな初心者プレイなんて見てて楽しいのだろうか……と思うのだけれど、宗一郎さんはいつも私が四苦八苦して進んでいく様子を時に褒め、時に笑って見ていてくれる。お陰でなんとかクリアまでこぎつけることができてすごく楽しい。

「つーか千春、顔赤いな。大丈夫か？」

「あ……私、ボス戦中、息止めてたかもしれないです……」

「ははっ、すげえ集中力。ちよっと休憩しようぜ、棒アイス貰ったから」

そう言って立ち上がった宗一郎さんの、背の高い後ろ姿を盗み見る。

——ゲーム以外でも、宗一郎さんはすごく優しかった。

来てすぐの時は、落ち着かなくて部屋にこもりがちだった私を、猫がいるからと外に連れ出して、可愛いキジトラの子を紹介してくれたり。

どこからか大きいスイカを貰ってきて、二人でスイカ割りをしたり。

近くのきれいな川まで遊びに行つて、一緒に水切りをして遊んだりもした。

宗一郎さんとお屋敷で過ごす日々は、まるで物語で見る夏休みのようで、人生のどの時よりも楽しくて。

私が、ずっとここで宗一郎さんと過ごしたいと思うようになるまで、そう時間はかからなかった。

「あ、もうこんな時間ですね……お風呂入らなきゃ」

「そうだなー、真ボスはまた明日にすつか」

「はい、明日がんばります」

アイスを食べながら頷く。千春ならすぐ出来るだろ、と笑ってくれた。
明日も楽しみだな、と思いながらお風呂に向かった。

(……どうしたら、ずっとここにいられるかな……)

服を脱ぎながらぼんやりと考える。

お父さんは「暫くの間」と言っていたから、そのうち帰ってくるのだと思う。

家が無事かはわからないけれど、そうなればいつまでも居させてもらうわけにもいかな
い。

私をもっと便利な存在になれば……と思うが、宗一郎さんは一人暮らしが長いからか、
家事は卒なくこなしてしまふ。

お掃除なんかはちょこちょこ近所のお婆さんに頼んでいるようだけれど、それも出来な
いからというよりは相手を思つてのことだろう。

（こないだは下のお婆さんに、お嫁さんだつて、勘違いされちゃったんだよね）

いつも美味しいご飯を作ってくれるお婆さんにご挨拶をしたときに、まあこんな若くて
可愛い嫁さん連れてきたの！と言われてしまった。宗一郎さんは焦った顔で嫁さんじゃ
ねえよ！と否定していたけれど、私はこっそり嬉しがっていたのだった。

お嫁さんになれば一番うれしいけれど、どうしたらなれるだろう。

シャンプーをしながら私は考えに考え、そしてひとつの結論に辿り着いた。

（――そうだ、夜這いしよう）

既成事実。そう。既成事実があれば。

決心してから私は毎日チャンスを伺っていた。

といつても宗一郎さんは寝るのが遅いし、仲間内と仕事の話をしていたりで忙しそうなことが多い。なかなかいい機会がないな……と焦っていたある夜のこと。

珍しく夕方ごろに出掛けた宗一郎さんがずいぶん酔って帰ってきた。

「！ 宗一郎さん、おかえりなさい。わ……大丈夫ですか？」

「ただいま、いやー飲まされたわ……酒臭えよな、ごめん。風呂入ってくるから先寝てろよ」

今日は何かの作業が終わったらしく、仲間内で飲み会だったようだ。

宗一郎さんはいつも晩酌をしているが酔った姿は見たことがなかった。今日は顔も赤いし、足取りもどこかふらふらとしている。

大丈夫だろうか、という気持ちと、絶好のチャンスだ、という気持ちが湧き上がる。

（今日なら……もしかしたら……!）

私はそのままおやすみなさいを言って、部屋で寝たふりをして深夜を待った。

そしてもう2時を過ぎる頃、ばくばくする心臓を抱えながらも、宗一郎さんの部屋に忍び込むことに成功した。

（ね、寝てた、良かった……。えっと、まずは……起こさないように、布団の中に入
て……）

静かに寝息を立てている宗一郎さんの寝顔にドキドキしつつ音を立てないように布団に
近づく。

夜這いのやり方は全くわからなかったのでスマホで調べた。

震える手で布団をめくり、宗一郎さんの体温でとても暖かなその中に寄り添うように身体を潜り込ませる。

（こ、ここまでいったら、宗一郎さんの、服を脱がせて……!）

ぐくりと唾を飲み込み、覚悟を決めてスウェットのズボンに手をかけ、少しずらした瞬間だった。

大きな身体が突然身じろぐ気配がして「ひえっ」と声が出てしまった。

「——ん……、……千春……?」

「あわ、あ、お、起き……っひゃ、」

「なあんだよ、そんなに慌てて……んあ……?」

眠たげな、吐息の混じった低い声に体が固まる。

ぼーっとした目でこちらを見る宗一郎さんに、スウェットを握ったまま固まる手を取ら

れてしまつて全身が熱くなった。

「あ、私、その、あの、ご、ごめんなさ……っ」

「……もしかして、襲おうとしてた？　ダメだろ。危ないぜ、特に、俺みたいなのはさ」

ゆらりと起き上がった宗一郎さんに、両手ともシーツに縫い付けられて、覆い被さられてしまった。

月明かりに照らされた顔が、どこか熱に浮かされたようだ。

「ご、ごめんなさい……その、私、宗一郎さんと、ずっと一緒にいたくて……っ」

「ふーん……それで、酒飲んでたから起きねえうちに襲っちゃおう、って？」

「うう……ごめんなさ……っひゃ、っ」

「悪い子だなあ、俺はずつと我慢してたのに。こんな事されたら、抑えらんなくなっちゃうだろ……？」

首筋で、ちゅ……っ♡　と音が鳴った。くすぐったさに身体が震える。

どうしていいかわからなくて逃げたくなるけれど、今まで見たことがないような熱を孕んだ視線を向けられて、何も動けなくなってしまう。

「が、我慢……？」

「そうだよ。これでも必死だったんだぜ？ ああ泣き虫だった千春が見違えるくらい綺麗になつてて——……なあ。千春、なんで俺がお前より遅く寝てたと思う？」

「へ……わ、わからな……っ」

囁くように低く囁かれて身体がぶるりと震えてしまう。

こつんとくっつけられた額がひどく熱い。

「千春が寝た後に、千春で抜くため——な、危ないだろう？」

「ひ、ひえ……っあ！？ く、くすぐった……待つ、は、恥ずかしい、宗一郎さん……！」

ちゅ♡ ちゅ……っ♡

信じられないことを悪戯っぽく囁かれて、細い悲鳴しか出ない。

何度も首筋や鎖骨に吸い付かれてくすぐたくて身じろぐ。自分から布団に入っただし、望んでいたことをされていたはずなのに恥ずかしくてたまらない。

勇んで夜這いしたもの、こういうことは全てが初めてだった。

「ちよつとキスしたぐらいでそんな恥ずかしがつて、どうやって俺を襲うつもりだったわけ？」

「それ、は……く、くちとかで、っあう、っ！？♡ だめ、宗一郎さ……っ」

「へえ、可愛いお口でござん仕頑張ろうとしてたんだ。健気だなあ、でも俺がいつも考えてたのはさ……」

すり♡ すり♡ すりすり……♡♡

あちこちにキスされているうちにパジャマのボタンを外されてしまっていたらしい。キャミソールの上からゆるゆると胸元を撫でられる。

自分が触られることは全然想定していなくて、それなのに身体は素直に触られたことを嬉しがって、ぴん♡ と乳首の先っぱが硬くなってきたしまった。

「ここ触ったらどんな顔すんのかな、とか。気持ち良くてぐずぐずにとろけてるところ見てえなあとか、そんなことばっか……」

「くくう……うそ、あ、あっ!?!?♡ やつ、そこ、ううっ……♡」

カリ♡ カリ♡

カリカリカリカリ……♡

ここ、って言うみたいに、宗一郎さんの短く切りそろえられた爪先が布越しにもわかるほど硬くなったそこを引っ掻く。

(うう……口でするのとか、上に乗るのとか、イメトレしてきたのに……! おっきな身体に抑えつけられてて全然できない……っ♡ 囁かれる度、うれしい♡ でいっばいになって……カリカリされると、お腹の奥、うずうずしてきちゃう……♡)

「ふ……ちよつと引っ掻かれたぐらいで、そんな顔すんの? 想像してたよりすげえエロい……あ、こら、逃げんなって。自分から襲ってきたんだろ……?」

「っひい、ん……っ♡ ちが……からだ、かってに、ああっ♡」

きゅ♡ すりすり♡

かりかり♡♡

服を着たってわかってしまうくらい膨らんだそこを摘まれる。

先程よりも強い刺激に身体が勝手に反応してずり上がってしまうのを片手で止められて逃げ場をなくされてしまった。

「摘まんて捏ねくり回されるの好き？ 太ももすりすり押し付けちゃって、かーわいいな

あ、千春……」

「やつ、ああつ、あつ♡ そこばっかり、あ、うあつ♡」

きゅ♡ こねこね♡ カリカリカリ♡

囁かれながら弄ぶみたい捏ねられては引つ搔かれて、宗一郎さんの腕の中でびくびくと震えることしかできない。

無意識のうちに抱きついて、お腹にたまった熱を逃がそうと腰をすり寄せてしまう。

「甘い声出しながら腰くねらせて、おねだり上手だな、千春う……？　ほら、乳首も嬉しそうにかたーくなってる……もう片っぱいもして欲しい？　なーんにもしてねえのに、ぴくっ♡　って揺れてて、すっぱえエロい……」

「……は、恥ずかし……あ、あっ！？♡　だめ、宗一郎さ……っそこ、食べちゃ、だめええ……っ♡」

するとキャミソールをたくし上げられてしまった。

胸の膨らみを辿るよう添わされた唇に慌てて身を起こそうとしたけれど、ダメって言うみたいに、ちゅうう……♡　と、乳首を吸われて頭に火花が散る。

「ん、ちゅ……♡　ははっ、ダメ？　俺に食われに来たくせに？」

「ううっ……だって、これ、あっ♡　き、きもち、よくなっちゃ……っんああ♡　うう、吸うの、やあ、あ……っ……っ♡」

「だーいじょうぶだって、気持ちいいの、しっかり受け止めとけよ。千春がぐずぐずになるとこ見てえって言ったろ……？」

ちゅっ♡ れろれろ♡

こりゅこりゅこりゅ♡

食べられてしまった乳首を舌先で捏ね回されて、それなのにもう片方をいじるのもやめてもらえなくて、どんどん腰に甘い疼きが溜まっていく。

（これ、むり♡ 吸われる度ぞわぞわしちゃう♡ 自分で触った時より全然気持ちよくて♡ こりゅこりゅされる度、頭ばちばちして♡ こんななされてたらずぐずぐずになっちゃう♡ あ、あ、乳首触ってた手、下にずらされてる……♡ どうしよ、さ、触られちゃう……っ♡）

「……ははっ、下腹ひくひくしてる。なあ千春、もしかして期待してた？ ここ、触られちゃうの……」

「っあ、あ、だめ、そこ、は……っ！♡」

するる……♡ と手が下に降りていく。

宗一郎さんの手が目指しているそこは——どこまでできるか分からなかったけれど、い

つでも使えるように思つて——部屋に来る前に、自分で少し触つて濡らしておいた、ところだ。

その上、胸を吸われて余計濡れてしまっている。

見られたくなくて逃げようとずり上がると、それを良いことにパジャマを脱がされてしまった。

「……すげえな、千春、糸引いてる……胸だけでこんな、まんことろにしたんだ？」

「ちが、ちがうう……っも、見ちゃやだあ……！」

「違う？　へえ……ああ、わかった。準備してたんだろ。俺んところ来る前に、自分で触った？」

「……っ……うう……っ」

あつさり答えを当てられてしまつて恥ずかしすぎる。

身体を抑えられていて抵抗もできないのでせめて布団を手繰り寄せて顔を隠すと、宗一郎さんがくつりと笑う声が出た。

「図星、ね。はー、マジで可愛いな……っーか千春、まんこ丸出しで顔隠してんの、すげえエロいけど大丈夫？」

「ひっ……も、やだあ、恥ずかしいから……！　言わないで、っんあ！？　あっ、あっ、あっ♡♡」

カリカリカリ♡

こすこすこすこす……♡

すっかりぬるぬるになってしまったパンツの上から、クリトリスを探し当てられて爪先で何度も往復される。

あまりの刺激に力をかけて開かされていたはずの足が自然と開いてしまった。かくかくと腰が揺れてしまう。

「クリ好きか？　子犬みてえに腰揺らして、まんこヒクつかせて……そんなに好きなら、いっぱいしてやるよ……♡」

「ひい、んん……っ♡　や、まって、宗一郎さ……あうっ、あっ♡　だめこれ、こし、とまんな……っ♡♡」

こすこす♡ すりゆすりゆ♡

カリカリカリ♡

はしたなく揺れる腰に合わせて何度もカリカリ♡　されて気持ちいいで頭がいっぱいになっていく。

（だめ、きもちいい♡　クリきもちいい♡♡　宗一郎さんの指、じぶんでするより絶対きもちいい♡　熱くて大きくて、っあ♡　そこだめ、裏筋ぬるゝゝって伝って、先端こりこりいじめるのだめ、頭ばかになっちゃうくらいきもちいいよお……っ♡）

「ふ……腰浮かせてまんこ差し出して、気持ちよさそうでかーわいいなあ……千春、顔も見せろよ。ヨがってる顔、ちゃんと見せて？」

「やあっ♡　恥ずかし、あっ、お布団とらないで、あっ……うう……っ♡」

「真っ赤な顔で目うるうるにさせてもだーめ。全部見せろよ、ずっと千春のこういう顔、見たかった……」

布団を取られて、ばたついていた両腕もまとめて頭の上で束ねられてしまった。みつともないほど感じてしまっているところを宗一郎さんの熱っぽい瞳が余すところなく見つめている。

「ひい……ん……っ♡ 宗一郎さん、だめこれっ、やめて、わたし、あぁっ♡」

「今やめんの逆にキツイだろ、それとも焦らして欲しい？ イきそうになってぶるぶる震えてるクリ、何回も寸止めされて……泣きながら、もうイかせてえ♡ って千春からおねだりしてくれんなら、俺はそれでもいいけどな……？」

ちゅこちゅこ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅぬりゅっ♡

ぐちゃぐちゃになってしまったパンツ越しに、愛液をまとった指で強めに擦られて身体ががくがくと震え出す。イきそうなのもすぐバレてしまつて恥ずかしい。

「ううっ、やだぁ♡ も、っあ、ううっ♡ やっ……あっ、とめ、とめるの、やっ……♡♡」
「ははっ、やだやだ言うからやめて欲しいのかと思ったんだけど……やめられるほうが、嫌

なんだ？」

「~~~~ううっ……ん、やめるの、……やだあ……っ♡」

「かーわい……ん、このまま千春のエロクリ、いくまでカリカリしていじめてやるから、俺の指でイけよ、千春……」

ぬる♡ ぬる♡♡

カリカリカリカリ……♡♡

甘やかに囁かれながら一度は離された指をまたぬると動かされて喉がヒクつく。止めたかったはずの腰はかくかくと小刻みに震えて、足もぴん♡ と張ってきてしまった。

——熱に浮かされた表情の宗一郎さんが、耳元にちゅうう……っ♡ とキスをしてきて、もうだめだった。

「あ、ああつ、うあ、いく、いくうっっ♡♡ そ、いちろ、さ……っああ、~~~~っ♡♡♡」

びくんっ♡ びくっ♡ びくびくびくっ♡

いつている間中、ずっと顔を見つめられながらおまんこを優しく抑えられて、あまりの

快感に仰け反ることしかできなかつた。

いったあともふーっふーっ♡ とはしたない呼吸が止まらない。

「上手にイけたなあ、千春……ずーっとお前のことばかり考えて抜いてたけど、非じゃねえくらいエロくて興奮する……」

「はっ、……へ……？♡ つぁ、あっ……宗一郎、さん……？」

愛おし気に頬へ口付けられて力が入らない。ビクつく身体がようやく収まった頃、宗一郎さんが身体を下げる気配がした。

挿れてもらえるのかな……？ とドキドキしてそっとな身を起こした瞬間、ぐちょぐちょになったパンツを取られ、屈んだ宗一郎さんにおまんこをまじまじと見つめられてしまった。

「あー……いったばっかだから？ 千春のまんこの割れ目、ひくひくしてる……クリもてらてらしてて、すげえ美味そ……」

「へ……っ？ っっっえあつ、あっ！？♡ だめ、宗一郎さん……っそんな、とこ、だめえ……っっ♡♡」

れろ……♡　ちゅっ♡　ちゅむ♡

先程いったばかりの敏感なクリに舌先が触れた。キスするみたいな音を立てて吸われて収まっていたはずの熱が戻ってくる。慌ててくしゃりと頭を掴むものの、両手とも抑えつけられてしまった。

「ん……ダメじゃねえだろ、千春、口でしてくれるつもりだったって言ってたよな。じゃあ俺もさ、千春にしていよいよなあ……？」

「そ……っんな、わたひ♡　も、いらな、あぁっ♡♡　ひぁ、あ、あっ♡」

れろ♡　れろ♡　ちゅ♡

れろれろれろ♡♡

必死に首を振るけど私のおまんこに顔を埋めている宗一郎さんには届くはずもない。甘やかにクリトリスを舐める舌先が気持ち良すぎて濁った声しか出ない。

（しらない♡　こんなのしらない♡　舌で全体包まれてぬるぬる擦られちゃうのだから、きも

ちよすぎて頭ばかになっちゃう♡ やだやだ♡ こういうの、私がするんだったのに……っ
あ、あ♡ 吸われながら指……っぽっぽされてる、だめこれ……っ♡)

っぽ♡ っぽ♡

くりゅくりゅくりゅ……♡♡

濡れそぼったおまんこの浅いところに、指が入ったり出たりしている。それだけで気持ち良くて鼻にかかった甘い声が出てしまうのに、クリトリスを転がす舌も止めてはくれない。

「ん……ちゅ……っはは、子犬みてえな甘い鼻息エロすぎ……はあ、この奥まで俺のにしてえな……ちんぽでいっぱいにして、可愛くやだやだ♡ ってする千春の腰掴んで揺さぶって……一番奥にびゅーって精子出して、俺のだけにしたい……」

「っああ、ん……っ♡ うう♡ して、していいから……っふあ、あっ、あ……っ♡」

ぢゅっ♡

ちゅぽ♡ ちゅっぽ♡ れろれろれろ♡♡

囁かれる熱っぽい言葉に興奮してしまう。あまりの快感に涙すら滲ませながら何度もク

リトリスに吸い付かれて甘えきつたひどい声しか出ない。

気付けば腕を抑えていた宗一郎さんの手をぎゅっと握っていた。

「ん……ナカひくひくしてきた、千春、イキそう？ さっきいったばつかなのに、気持ちいいまんなんだな……」

「んっ、うう、あっ♡ だって、舐められるの♡ きもち、よくてえ、あつだめ、それ、すぐ、いっぢやう……っ♡♡」

ちゅぽちゅぽ♡ ぬりゅぬりゅ♡

れろれろれろ♡♡

イケイケ♡ って言うみたいに刺激を送り込まれる。濁った声が抑えられない。足先にまた力が入って、太ももで宗一郎さんの頭を挟んでしまう。

宗一郎さんは気にすることなく、繋いだ手の指を絡めてぎゅうっ……♡ と握ってくれた。

「あつだめ、イク、あ、あ、あっ？♡ だめえ、宗一郎さんっ、も、ああっ♡ っなんか、

出ちゃ、~~~~っ♡♡」

ぷしっ♡　ぷしゅっ♡

ぷしゃああ……っ♡♡

絶頂で何度も大きく震える身体と共に水音が迸る。思い切りかけてしまったんじゃないか、と思ったけれど、宗一郎さんは身体を起こしてまだ溢れ出ているそこを熱っぽく見つめていた。

「はは、イキ潮すつご……上手に潮吹きも出来たな、千春」

「……しお、ふき……？　あ、あつ、おふとん……汚しちゃって……ごめんなさい……っ」
「初めてしたのか、潮吹き。ふ、そうか……いや、汚いもんじゃねえよ。ああでも、足ガクガクになっちゃったな……」

労わるようにタオルに包まれてしまった。

もう終わり……？　と目を瞬かせると、ほんのり赤らんだ顔が眉を下げて緩く笑んだ。

「わっ、私……へいき、です」

「ぶるぶる震えて何言ってるんだ、続きしたら千春、気絶しちゃうぞ」

「平気っ……お、終わるのやです、おくまで、俺のにするって、」

「バカ、無茶させたかねえんだよ、今度な、今度。次は奥まで俺のものになれよ、千春」

宥めるようにちゅ、と額に口付けられて何も言えなくなる。

正直なところ、激しくイったからか小刻みな震えが止まらない。額いて身を預けると、いい子だな、と頭を撫でてくれた。

べしゃべしゃになってしまったシーツを丸めて、新しいシーツで私は、宗一郎さんに抱き締められて眠った。

翌朝。

朝日が差し込む部屋で宗一郎さんよりも先に起きた。

タオル一枚にくるまれた格好で眠ってしまったらしい。着替えないと、と思って身を起こす。

（一回、部屋に戻らなきゃ……ん、宗一郎さんも、起きた……？）

少し身じろいだあと、がばりと身体を起こす気配がする。

振り向くと、呆然とした顔で私を見る宗一郎さんがいた。

昨日まで赤かった顔がひどく青い。かさついた唇が震えながら開くのを、どこかスローモーションのように感じた。

「――千春……、ごめん……」

掠れ切った声が広い部屋にむなしく木霊する。

その時になって私はようやく思い知った。

昨夜の夜這いは失敗だったのだ、と。